市が魅力を、価値を、エネルギーを「私に」伝える情報紙
To 広報とめ トゥー・ミー Me
12 Dec 2026 Vol.379

ときめき人

Tokimeki bito



友の無念を胸にプロペラおやじが人命救助に挑む

登米町中町出身

佐々木 甲さん

ささき　こう
1957年生まれ

Profile

旧米谷工業高校を卒業後、就職を機に東京都に移住。2024年に設立した合同会社AIR MAXで、山梨県を拠点にエアボートの開発・製造、操作指導のほか、自ら救助活動にも当たっている。現在は、より配備しやすい小型のエアボートを開発中。



エアボートはスクリューではなくプロペラの風で進むため、がれきや路面が見えるような浅瀬のほか、場所によっては陸地でも通航が可能。

「あの時、エアボートがあれば助けに行くことができたのに――」。そう語り、唇をかみしめる。

佐々木さんとエアボートの出会いは中学生の時。テレビで見た迫力ある姿に魅了され、「いつか自分でエアボートを造りたい」という夢を抱いた。人生の転機となったのは東日本大震災。散乱したがれきにスクリューが引っかかり、救助艇が近づけない状況を目の当たりにしたことだった。友人も犠牲となり、どうしようもない悔しさが心に深く刻まれた。「早く造らないと、救える命がまた救えなくなる」と、独学でエアボートの開発を決意。少年時代の夢が使命に変わった瞬間だった。

当時は東京都で店舗デザイン会社を経営。生活費や貯金を切り詰め、仕事が終わった後に深夜まで開発に没頭する日々が始まった。数々の失敗と試行錯誤を繰り返し、ついに世界初となる災害救助用エアボートを完成させた。何よりもこだわったのは救助機能の高さ。転覆しても自動で元に戻る装置や、水中から要救助者を引き上げる「スクーパー」を開発。その性能が高く評価され、東京消防庁や高知県警察などに配備された。

「水害は年々深刻になっていますが、『あきらめない心が命を救う』と信じて活動しています。新しいアイデアもあるので、早く完成させたいですね。今では『プロペラおやじ』なんて呼ばれてますよ」と笑みをこぼす。東日本大震災の悲しみを乗り越え、情熱を注いで生み出したエアボート。佐々木さんは、これからも被災地に希望の風を送り続ける。

編集後記

▼第一子が生まれ、外出時などに優しく声がけいただく機会が増え、子どもを温かく見守る人たちが地域にたくさんいることに気付きました。仕事や子育てに追われる日々ですが、特集の取材を通じて、わが子だけでなく地域の子どもたちも大切にできる自分でありたいと感じました。（添田）

▼毎年大勢でにぎわう産業フェスティバル。取材を終えてからいくつかの行列に並び体験しました。隣に座った子にクスっと笑われたチビこけしの絵付け。スパイス&ハーブソルト作りなど、市内の産業を満喫しました。ハーブソルトは香り豊かで、さまざまな料理に重宝しています。（森田）

▼取材中、エアボートへの思いを語る佐々木さんの目は、少年のようにキラキラしていました。その行動力と、失敗しても諦めない情熱に感嘆。寒くなると活動を停止しがちな私の心にも、熱い風が吹いた気がしました。この冬は寒さなんかに負けないぞ。（高橋）

登米市公式ホームページ
https://www.city.tome.miyagi.jp/

登米市メール配信サービス
（防犯や防災、市政に関する情報などを配信）
https://plus.sugumail.com/usr/tome/home

登米市公式LINE
（市政、イベント情報などを配信）
https://line.me/R/ti/p/%40972tqqam

広報とめ（12月号）
発行日／令和8年11月18日　発行／登米市
〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字中江二丁目6番地1
編集／総務部市長公室 広報広聴係
TEL.0220-22-2090　FAX.0220-22-9164
E-mail:koho@city.tome.miyagi.jp　印刷／川内印刷株式会社